

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2010～2013

課題番号：22242019

研究課題名(和文) 比較史的観点からみた日本と東アジア諸国における都城制と都城に関する総括的研究

研究課題名(英文) Comparative history of capital system and capital in Japan and the East Asia various countries

研究代表者

橋本 義則 (Hashimoto, Yoshinori)

山口大学・人文学部・教授

研究者番号：60164802

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 31,100,000円、(間接経費) 9,330,000円

研究成果の概要(和文)：海外研究者との共同研究、発掘機関研究者との研究連携で、共同研究会を定期的で開催し、都城遺跡の踏査を行って多面的かつ具体的に東アジアの都城制を比較検討した。研究成果には、(1)国際公開研究会の開催と発表論文報告集の刊行、(2)学術研究成果公開促進費による論文集『東アジア都城の比較研究』の刊行、(3)内外の学会・学術講演会での18回の講演・学術報告、(4)代表者や分担者の論著70篇以上の公表がある。特にこの間集中討議した遷都と廃都の問題では、旧都を再用しない日本では遷都と廃都が一体であるが、旧都を再用する中国や朝鮮では廃都が行われず、この事態は王朝の交替の有無と関わることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：We held regular joint project meetings and made surveys of the remains of traditional capital cities in East Asia several times, together with scholars and researchers of the university and the excavation organization in Asian countries. We also made the comparative analysis on the system of capital cities in East Asia from different points of views and made clear the character of each capital city. We discussed historical characters of traditional capital cities in East Asia, particularly on the problem of the transfer and abandonment of the capital cities. As a result, our project showed clearly the difference between Japanese and Chinese capital cities. The capital cities were abandoned and transferred in ancient Japan, however the capital cities were not abandoned but reused in China. This is because that change of dynasties were common in Chinese history, but on the other hand, Japan has no change of the dynasty.

研究分野：史学

科研費の分科・細目：日本史学

キーワード：都城制 都城 東アジア 日本 比較史 国際共同研究

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の背景については、既に科学研究費補助金基盤研究(A)「東アジア諸国における都城制及び都城に関する比較史的総合研究」(研究代表者:橋本義則、課題番号:10001609、平成16~18年度、以下基盤研究(A)と略称)及び科学研究費補助金基盤研究(B)「東アジア諸国における都城及び都城制の比較を通じてみた日本古代宮都の通時的研究」(研究代表者:橋本義則、研究課題番号:19320102、平成19~21年度、以下基盤研究(B)と略称)の研究成果報告書において既に述べたとおりである。

日中韓などの東アジア諸国が今日まで共有してきた様々な文化要素の多くの淵源が歴史的には中国に求め得、そのような文化要素を継授・共有するなか中国の強い影響のもと、日本・朝鮮・渤海・ベトナム、さらに種々の北方騎馬民族など中国の周囲に位置する諸国で、当該国家の政治制度と密接な関係をもって成立したのが都城と都城制であり、一部の国家においては近代に至るまで各王朝の首都などで維持され続けてきた。それ故にこれらの諸国では地中に埋もれた遺跡としてだけでなく、現実に地上に遺る遺構として存在するため、それらと文献史料を照合しながら多様な観点・要素から比較検討することが十分可能である。一方、古代の終わりとともに都城及び都城制が崩壊した日本や渤海などでは、今日その遺構が地中に埋もれているため、発掘調査や遺跡踏査などによってようやく遺構を確認できるとどまる。

このような状況に置かれた都城と都城制に関する研究は、それぞれの国の歴史を専門とする歴史研究者や考古学研究者によって進められ、個別には注目すべき研究が挙げられつつあるが、それらを、中国を中心とした東アジア文化圏の中で、しかも比較史的観点から検討、解明しようとする視点は依然として乏しい。その際注意すべきは、得てして中国の影響を受けた共通要素の抽出に主眼が置かれがちであるが、むしろ相違点、周囲の諸国の独自性に注目し、中国の影響で受け入れた都城や都城制が、その成立・展開の過程において極めて多様性をもっていることである。このような多様性を前提にして東アジア諸国に共通する政治制度である都城制とそれに基づいて建設された実際の都城を、それを存立せしめている政治制度・社会状況・文化基盤などの諸要素に分け、詳細に比較検討し、具体的に共通点と相違点を確認することに主眼を置き、その上でそれを生み出した国々の歴史的実態に迫り、都城制と都城を通じて抽象的でない具体的な比較史を試みる必要がある。

このような背景をもって実施された2期6年に亘る国際的な共同研究は研究成果の上でも、また人的交流や情報の交換・共有などの点でも大きな成果をもたらした。それは国際的な交流はもちろん、日本国内の都城発掘

調査機関の主力担当者が定期的に集い、特定のテーマについて議論を行い、また中国史や朝鮮史など異なる分野の研究者と交流することによって得られた成果は極めて大きなものであった。そのような研究環境・研究組織を維持しつつ、新たな研究課題に迫ってゆくことが今後の都城及び都城制解明の研究に必要であると認識した。

### 2. 研究の目的

本研究は、上記した基盤研究(A)で行った「東アジア的視点からする比較史的研究」と、それを踏まえた基盤研究(B)でそれと並行して実施した「日本の古代宮都遺跡の通時的な変容とその背景を具体的に探る基礎的な研究」での研究成果と研究方法を前提として、東アジア諸国における都城制と都城に関する具体的研究を統合的に行うことを第一の目的とした。また、併せて研究を推進するための組織を確固たるものとして構築し、研究期間終了後も国内外の研究機関・研究者等との人的研究交流、研究情報の交換を維持・継続することも今ひとつの目的であった。

まず本研究において東アジア諸国にまで研究・踏査の対象を広げたのは、都城遺跡に関する具体的な事実の確認・検討だけでなく、都城制と都城の背後にある政治的・社会的・思想的・文化的な背景を検討し、互いの相異点と共通点を明かした上で、具体的に比較するためである。そのために単にゲストスピーカーとして研究者を海外から招聘し、その研究発表について討論するだけでなく、彼らが研究の対象としている都城遺跡に組織として赴き、それらを彼らの協力の下で踏査し、現地で討論するためである。

また、国内では都城遺跡の発掘調査が毎日行われ、大量のデータが蓄積・公開されているが、研究機関や研究者のあいだでそれらが共有されているか否かは疑問である。それ故に都城遺跡の発掘調査を担当する奈良県立橿原考古学研究所・大阪文化財研究所・大津市埋蔵文化財調査センター・向日市埋蔵文化財センター・京都市埋蔵文化財研究所、さらに都城と関連の深い大宰府の調査を担当する太宰府市教育委員会などより研究分担者あるいは研究協力者を選び(本研究の研究遂行期間終了前後に他機関に異動したのものもいる)彼らとの共同研究や国内外での都城遺跡踏査を通じてより具体的な通時的比較研究を行い、日本の古代都城間にある共通点と差異点を事実として明らかにすることがもう一つの研究上の目的である。

### 3. 研究の方法

本研究では、これまで6年間に亘って科学研究費補助金の交付を受けて実施してきた2期の国際的共同研究基盤研究(A)及び同(B)での比較史的研究方法とその成果を受け継いで研究を一層進展させ、またそこで結成され6年間維持・発展してきた共同研究組

織（東アジア比較都城史研究会）をさらに継続します。ますます確固たるものとするために、上記の共同研究で設定した空間的な比較である東アジア諸国間での比較と、時間的な比較である日本の宮都間での通時的な比較とを経緯とする基本的な研究方法をとる。そして、具体的には、(1)異なる目的と形態による様々な研究会の開催と(2)国内外に所在する都城遺跡・都市遺跡の踏査とを研究推進の両輪とし、さらに(3)(1)及び(2)の進行状況の即時的公開のため新たなHPの構築と更新を行うこととした。これらによって、これまで進めてきた研究の成果を含めて、統合的に全体を理解するべく研究を進めた。また、併せてこれらから派生する都城及びそれに関連した研究を研究代表者・研究分担者・連携研究者が個別に進めるとともに、その成果を様々な形で公表することにも努めることとした。

(1)目的及び形態を異にする三種の研究会の順次的及び並行的開催

一つは、研究代表者と研究分担者・連携研究者を中心に、国内外の研究協力者らの協力を得、新たな研究課題の設定を行って東アジア諸国における都城制と都城に関する比較研究を、従来の二つの科研基盤研究(A)及び同(B)での研究の方法と成果を継承した共同研究会の開催によって実施・推進した。本研究期間の前半2カ年において、基盤研究(A)及び同(B)で取り上げることができなかった研究課題のうち、「遷都論・廃都論」を主たる課題に設定して検討を行った。研究会の形態も基本的に従来通り参加者全員が発表することとした。また、必要に応じて海外研究協力者を招くとともに、研究組織外の研究者にもゲストスピーカーとして研究報告をお願いし、組織外との交流も可能な限り進めた。

これまでの2期の科研での研究成果と、今回新たに設定し の共同研究会で検討した研究課題「遷都論・廃都論」に対する検討を踏まえ、第3年度目に「東アジア都城比較の試み」と題した国際公開研究会を2013年1月に開催することにして準備を進めることにした。また、その準備のための研究会と打ち合わせ会を2012年6・10両月に2回開催した上で国際公開研究会に臨むこととした。

さらに、基盤研究(B)で実施した日本古代宮都遺跡踏査で、種々の事情によって踏査を行い得なかった平城京と由義宮について、踏査を実施するとともに、平城京については踏査ののちに研究会を開くこととした。踏査実施後の研究会開催に当たっては、基盤研究(B)と同様に、両遺跡の発掘調査担当機関である県市町など、行政機関とそれに所属する研究者の方々の協力を得て、現地で開催することとした。

これら三種の研究会を順次的および並行的に開催することによって、東アジアにおける都城制と都城に関する統合的な研究が可

能となると考える。

(2)国内外の都城遺跡・都市遺跡の踏査

海外所在の都城遺跡及び都市遺跡の踏査については、まず基盤研究(A)及び同(B)と同様に、中国・韓国所在の都城遺跡を中心に、特にこの10年の間に開発とそれに伴う発掘調査や保護整備によって変化した遺跡の状況に注意しつつ、海外研究協力者らとその所属研究機関(中国社会科学院考古研究所・韓国国立文化財研究所)等の協力のもとに実施することとした。中国では特に河西廻廊と河南省所在の都城遺跡及び都市遺跡についてやや長い期間の調査を行った。また、東アジアの都城遺跡と比較するべく、古代ローマ帝国の都市遺跡を中心に、イタリア・チュニジア(本来は最も遺跡の残りのよいアルジェリアやリビア、シリアなどでの踏査が必要であるが、当該国の政治的社会的情勢から、これらの国々における踏査は断念せざるを得なかった)で、また東東西双方の都市遺跡について西の交差点であるトルコにおいて踏査を行った。チュニジアの踏査では日本女子大学の佐藤育子氏(カルタゴ史)と筑波大学北アフリカ研究センター(チュニス所在)、トルコでの踏査には京都大学の井谷綱造氏(ルーム・セルジューク史)の全面的協力を仰ぐこととした。

国内の都城遺跡については、基盤研究(B)で踏査できなかった平城京、由義宮の踏査を実現することとした。踏査に当たっては、奈良県立橿原考古学研究所・奈良市・大和郡山市、柏原市歴史資料館の協力を得ることができた。なお、平城京南辺と松林苑の踏査に伴って(1)に記した研究会を開催し、具体的な発掘調査状況を知るとともに、発掘調査担当者との意見交換・討論を実現させた。

(3)国際公開研究会と遺跡踏査情報の公開

(1)の国際公開研究会と(2)の国内外所在の都城遺跡・都市遺跡踏査の情報を、新たに開設した東アジア比較都城史研究会のHPで公開することとした。国際公開研究会については、開催要項などをHP上に掲載するだけでなく、資料の配付方法について、事前にHP上に研究会の資料をアップロードし、参加者が各自何からの形で持参する方法と当日資料を入れたUSBメモリーを配布する方法を試み、新しい研究会のあり方や経費の効率化をめざした。また、遺跡踏査についてはでき得る限り即時性をもって踏査の状況を公開するべく、いくつかの方法を試みた。一つは調査日誌と写真を迅速に公開すること、二つには踏査終了後整理がついた写真からを順次公開することとした。

#### 4. 研究成果

本研究は、これまでの6年2期に及ぶ共同研究と同様、研究期間の間に性急で拙速な結論を得ることを本来の目的としていない。また、本研究で得られた研究成果も共同研究の次元と参加した個人の次元で様々であり、

それをここに一言で表現することはむづかしい。従って、ここでは本研究の研究成果の外形的側面を中心に記すことにし、研究成果の内容面については下記の「5. 主な発表論文等」あるいは今後刊行される様々な刊行物や研究会のHPを参照されたい。

(1) 東アジア諸国の都城制および都城に関する国際的な共同研究体制は、これまで2期6年に亘った科研による共同研究以上に広がりと深まりを見せた。

これまでの共同研究会での研究成果と今回設定した新たな研究課題「遷都論・廃都論」に対する検討を踏まえ、第3年度目に当たる2012年に準備のための研究会を2回開催した上で、2013年1月5・6両日に国際公開研究会を京都(キャンパスプラザ京都)で開催した。2日間に亘った研究会では年初の休日にもかかわらず2日とも90名を超える参加を得た。また、参加者は、開催地京都はもちろん、大阪・奈良・兵庫・滋賀などの近県、さらには九州・関東・東北に及び、韓国からも都城制研究者5名の参加があった。さらに、多くの大学院生層や留学生の参加も得、本研究の対外的な紹介にも大きく役立った。

基盤研究(A)の研究成果を整理し、その後の研究成果も含み込んだ論文集『東アジア都城の比較研究』を、科学研究費研究成果公開促進費の交付を受けて刊行できた。本書には、本研究でも海外研究協力者をお願いした忠南大学の朴淳發氏が執筆した2編の論文も入っており、国際的な共同研究体制を維持した中で刊行できたと言える

#### 図4 東アジア比較都城史研究会第一論文集

(2) 国際的な共同研究は、さらに海外の都城遺跡踏査において大きく進展した。

中国では、中国社会科学院考古研究所の西安研究室(漢長安城、隋唐長安城、上林苑などの考古隊)および洛陽工作站(偃師二里头、偃師商城、漢魏洛陽城、隋唐洛陽城などの考古隊)、安陽工作站(殷墟、鄴城などの考古隊)などの全面的な協力によって夏の都城遺跡とされる偃師二里头遺跡を始め、商殷の偃師商城・殷墟・洹北商城、秦の咸陽城、漢の長安城・洛陽城、曹魏の鄴城、北魏の長安城、さらには河西迴廊所在の都城・都市遺跡の踏査を敢行でき、中国における都城・都市の始まりを調査できたことは大きな成果である。ただ問題点としては中国の国内法によって遺跡に関する数値データを取得することができないことである。中国の都城遺跡については今後衛星写真などを使った研究を精力的に進める必要があることを再確認した。

さらに中国の都城遺跡踏査では、上記した新宮科研と連携して、内モンゴル自治区で中国社会科学院考古研究所遼城工作隊の協力のもと遼金の都城遺跡を対象に共同調査を行うことができ、さらにモンゴルにおいてもモンゴル国アカデミーの歴史研究所の協力を得て、カラコルム・カルバルガズンなどウイグルや突厥、モンゴルの都城遺跡踏査が実

現した。特に遊牧騎馬民族の都城遺跡の想像以上の規模と構造に驚嘆し、今後研究の対象を遊牧騎馬民族に広げ、中国の都城との比較研究を進める必要があることを確認した。

韓国では、新羅・百済の都城遺跡と新羅の五小京の遺跡を、上記の田中科研に協力して踏査した。これまで共同研究を行ってきた忠南大学の朴淳發氏とは一層深い協力関係の構築ができ、さらに朴氏やゲストスピーカーとして招聘した韓国人研究者を介して研究協力をお願いできる研究者が増えた。また、上記の国際公開研究会に参加した5名の韓国人都城研究者とも協力関係が構築でき、研究代表者は彼らが所属する韓国古代史学会の大会に招聘され、講演を行った。

東アジアの都城遺跡と比較すべく、東西文明の交差地であるトルコにおいて、アッシリア、ペルシャ、ギリシャ、ローマ、東ローマ、ビザンツ、ルームセルジューク、オスマンなどの都市遺跡を、京都大学大学院文学研究科、中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所などの協力を得て実施した。

また、前期の科研以来、山口大学人文学部の研究プロジェクトとも協力を継続し、イタリア及びチュニジアにおいて古代ローマ帝国の首都ローマ及び植民都市などの遺跡を踏査した。特にチュニジアでの調査では専門家の佐藤育子氏の同行及び筑波大学北アフリカ研究センターの全面的な協力によって初めて実現し得たし、従来構築してきた範囲を超えて新たな協力関係を構築し得たことは、今期の本科研の大きな成果の一つである。

(3) 国内の古代都城遺跡研究では、本研究の間に研究協力・連携体制がさらに広がった。

共同研究会はもちろん、国際公開研究会とその準備過程、そして国内都城遺跡の踏査を通じて研究組織に属する研究者間で本研究課題に対する共通の理解と協力の必要性の認識はさらに深まった。その上、これらの過程を経て新たな協力者を多数得ることができ、それによってこの間しばしば研究代表者を中心に、現在進行中の都城および関連遺跡の発掘調査地を訪れ、つぶさにその状況を把握し、現地での具体的な討論が可能となった。

(4) 新たな比較都城史研究の広がりが研究組織所属の研究分担者によって試みられた。

上記したように、本研究はただちに研究生を求める短期的なものではなく、本研究を起点として、本研究に様々な立場で参加した研究者が様々な観点から新たな研究を始め、さらにそのために新たな研究組織を作り、研究の量的拡大と質的向上につながるからこそ重要であると考えている。

この点では既に研究分担者である新宮学氏を中心に近世東アジア比較都城史研究会が新たに組織され、平成21~23年度には「近世東アジアの都城および都城制についての比較史的総合研究」(研究代表者:新宮学、研究課題番号:21320130、以下新宮科研と略称)によって共同研究が行われ、平成2

5年度には研究成果公開促進費の交付を受けて本研究の研究代表者らも執筆した『近世東アジア比較都城史の諸相』が出版された。

また、本研究の研究分担者である田中俊明氏も新たに科研費に応募して採択され、本研究と平行して平成22～25年度に「朝鮮史における複都・副都の位置・構造・機能に関する調査研究」(研究代表者:田中俊明、研究課題番号:22401031、以下田中科研と略称)を行った。この研究成果も含めて現在本研究の研究代表者である橋本を編者として『日本の古代宮都と東アジアの複都制』(仮題)を編集中であり、2014年中には刊行予定である。

以上のように、本研究が孤立した研究としてではなく、科研費による他の研究はもちろん、研究代表者が所属する大学とも共同・連携して研究を進めることができたことは、今後の研究の一つのあり方を示唆するものとして本研究期間の成果の一つである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計10件)

橋本 義則、日本古代都城の儀礼空間と王権の位相、韓国古代史研究、査読有、71、2013、pp.317 - 353

橋本 義則、平安宮・平安京の構造と變貌、MUNHWAJAE Korean Journal of Cultural Heritage Studies、査読有、46 - 1、2013、pp.32 - 75

新宮 学、中国近世的羅城、城市学論叢1輯(中国・社会科学文献出版社)2012、pp.289 - 315

桑野 栄治、高麗末期の漢陽遷都論、久留米大学文学部紀要、査読無、第29号、2012年、pp.103 - 131

桑野 栄治、朝鮮初期昌徳宮後苑小考、久留米大学文学部紀要、査読無、第29号、2012、pp.133 - 163

馬 彪、古代中国帝王の巡幸と禁苑について、アジアの歴史と文化、査読無、15、2011、pp.15 - 30

桑野 栄治、韓国における近世都城史研究の動向、久留米大学文学部紀要、査読無、第28号、2011年、pp.17 - 31

小嶋 芳孝・E.Gelman ほか、ロシア沿海地方における渤海遺跡調査(2010年)、金沢学院大学紀要、査読無、第9号、2012、pp.29 - 42

妹尾 達彦、長安の変貌、歴史評論、査読無、720号、2010、pp.47 - 60

小嶋 芳孝・E.Gelman ほか、ロシア沿海地方における渤海遺跡調査(2010年)、金沢学院大学紀要、査読無、第9号、pp.29 - 42、2012

[学会発表](計19件)

妹尾 達彦、従太極宮到大明宮：唐代宮

城空間的變遷与都市社会構造的轉型、中国史国際學術研討会、2013.11.30、台北(台湾)(招待講演)

妹尾 達彦、帝都的風景、風景的帝都：建康・大興・洛陽、妹尾達彦、復旦大学中華文明国際研究中心国際会議、2013.8.16、上海(中国)(招待講演)

妹尾 達彦、恋愛と受験の誕生、妹尾達彦、中国社会文化学会2013年度大会、2013.7.7、東京大学法文一号楼(東京)(招待講演)

妹尾 達彦、The Center of the Agricultural and Nomadic World: Political Functions of Chang'n cheng, Tang and Sanggyeongseong Castle, Balhae、高句麗渤海学会2013年度大会、2013.5.24、ソウル(韓国)(招待講演)

橋本 義則、日本古代都城の儀礼空間と王権の位相 日本古代天皇制と都城、韓国古代史学会、2013.2.14、ソウル(韓国)(招待講演)

妹尾 達彦、復原隋唐長安 - 長安的都市計画 出版後 -、長安国際文化研討会、2012.11.1、西安(中国)(招待講演)

橋本 義則、平安宮・平安京の構造と變貌 - 古代都城から中世都市へ -、韓国文化財庁開庁60周年記念シンポジウム「統一王朝高麗と東アジアの都城文化」、2012.9.27、ソウル(韓国)(招待講演)

妹尾 達彦、東亜都城時代の誕生 - 七、八世紀的城市網、台湾師範大学客員講座、2012.1.15 台北(台湾)(招待講演)

妹尾 達彦、漢与唐 - 漢長安故城與隋唐長安城 -、台湾大学客員講座、2012.1.10 台北(台湾)(招待講演)

橋本 義則、東アジア比較都城史研究の試み - 日本から東アジアへ、そして再び日本へ、京都大学文学研究科・文学部公開講演会・第67回羽田記念館定例講演会、2011.12.17、京都大学法経7番教室(京都市)(招待講演)

妹尾 達彦、アジア都城時代の誕生 - 7・8世紀の東アジア -、国際シンポジウム「アジアの都市 - インド・中国・日本 -」、2011.12.3、国立歴史民俗博物館(佐倉市)

妹尾 達彦、隋唐長安城与郊外社会的誕生、第3届中日学者中国古代史論壇、2011.9.18、武漢(中国)(招待講演)

新宮 学、「洪武の都、南京城の景勝」、明清史夏合宿 伝統都市の形成、2011.8.11、聖護院宿坊御殿荘(京都市)(招待講演)

妹尾 達彦、都城時代の誕生、西北政法大學国際会議、2011.6.17、西安(中国)(招待講演)

妹尾 達彦、隋唐長安的城市文化与欧亚大陸東部の国際関係、唐代文史研究の新視野：以物質文化爲主 唐代文史学者記念社希德(Denis Twitchett)国際研討会、

2010.12.23、台北(台湾)(招待講演)  
妹尾 達彦、隋唐長安と國際關係的變遷、復旦大学中古中国研究前沿講座、2010.11.4 上海(中国)(招待講演)  
新宮 学、中国近世的羅城 以明代南京の京和外郭城為例、中国首届世界性城市論壇(中国社会科学院世界歷史研究所・杭州師範大学) 2010.10.29、杭州(中国)(招待講演)  
田中 俊明、百濟の複都・副都と東アジア、2010 世界大百濟典國際學術會議交流王国、大百濟の足跡を尋ねて(2010 世界大百濟典推進委員會・韓国忠清南道歷史文化研究院) 2010.9.30、公州(韓国)(招待講演)  
妹尾 達彦、The Urban Pattern of the China Past in World History、ESF-JSPS Frontier Science Conference Series for Young Researcher “Contact Zones of Empires in Asia and Europe: Complexity, Contingency, Causality、2010.3.3、九州大学(福岡市)(招待講演)

〔図書〕(計19件)

新宮 学・妹尾 達彦・橋本 義則・馬 彪・桑野 栄治・張 学鋒ほか、白帝社、近世東アジア比較都城史の諸相、2014、全 316p (pp.3 - 14・17 - 88・159 - 194・221 - 264)  
橋本 義則・妹尾 達彦・田中 俊明・山中 章・新宮 学・林部 均・朴 淳發ほか、東アジア比較都城史研究会、國際公開研究会「東アジア都城比較の試み」発表論文報告集、2013、全 322p (pp. 108 - 148・171 - 230・244 - 274・299 - 320)  
妹尾 達彦、東京大学出版会、講座東アジア海域に漕ぎ出す第6巻、2013、全 264p (pp.73 - 92)  
妹尾 達彦、山川出版社、アジアからみる日本都市、2013、全 336p (pp.45 - 78)  
馬 彪、京都大学学術出版会、秦帝国の領土経営:雲夢龍崗秦簡と始皇帝の禁苑、2013、全 500p  
小嶋 芳孝、石川県立歴史博物館、能登 - 石川歴史遺産セミナー講演録、2013、全 145p (pp.111 - 125)  
妹尾 達彦、中国・三秦出版社、唐史論叢、14、2012、全 410p (pp.296 - 311)  
妹尾 達彦、中国・中華書局、漢長安故城与隋唐長安城、輿地、考古与史学新説、2012、全 691p (pp.272 - 286)  
田中 俊明、韓国・チニンジン、百濟と周辺世界、2012、全 900p (pp.254 - 264)  
妹尾 達彦、明治大学大学院文学研究科、洛陽学國際シンポジウム、2011、全 217p (pp.207 - 217)  
妹尾 達彦、学生社、宮都飛鳥、2011、全 233p (pp.86 - 107)  
田中 俊明、サンライズ出版、琵琶湖と地域文化、2011、全 458p (pp.365 - 377)

橋本 義則、吉川弘文館、古代宮都の内裏構造、2011、全 336p  
橋本 義則・妹尾 達彦・田中 俊明・山中 章・馬 彪・新宮 学・桑野栄治・朴 淳發、京都大学学術出版会、東アジア都城の比較研究、2011、全 432p  
小嶋 芳孝、勉誠出版社、古代東アジアの道路と交通、2011、全 416p (pp.211 - 232)  
妹尾 達彦、台湾・新文豊出版公司、都城図中描繪的唐代長安的城市空間上冊、2010、全 744p (pp.211 - 243)  
妹尾 達彦、中央大学出版部、都市の千年紀を迎えて、2010、全 274p (pp.63 - 140)  
田中 俊明、韓国古代史学会・忠州大学校博物館、中原京の諸問題、2010、全 500p (pp.311 - 331)  
小嶋 芳孝、北海道大学出版会、北東アジアの歴史と文化、2010、全 606p (pp.213 - 229)

〔その他〕

ホームページ等  
<http://www.toa-tojo.com>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋本 義則 (HASHIMOTO, Yoshinori)  
山口大学・人文学部・教授

研究者番号: 60164802

(2) 研究分担者

妹尾 達彦 (SEO, Tatsuhiko)

中央大学・文学部・教授

研究者番号: 20163074

田中 俊明 (TANAKA, Toshiaki)

滋賀県立大学・人間文化学部・教授

研究者番号: 50183067

山中 章 (YAMANAKA, Akira)

三重大学・人文学部・教授

研究者番号: 40303713

新宮 学 (ARAMIYA, Manabu)

山形大学・人文学部・教授

研究者番号: 30162481

馬 彪 (MA, Biao)

山口大学・人文学部・教授

研究者番号: 20346539

林部 均 (HAYASHIBE, Hitoshi)

国立歴史民俗博物館・研究部・教授

研究者番号: 70250371

桑野 栄治 (KUWANO, Eiji)

久留米大学・文学部・教授

研究者番号: 80243864

(3) 連携研究者

小嶋 芳孝 (KOJIMA, Yoshitaka)

金沢学院大学・文学部・教授

研究者番号: 10410367